

2016 年度 明星大学心理相談センター活動報告

箕浦亜子・津里なおみ 明星大学心理相談センター

I はじめに

明星大学心理相談センターは、人文学部心理・教育学科心理学専修付属の心理相談室を前身として、2001年に設立された。2002年からは、臨床心理士資格認定協会「第1種指定大学院」に附設する施設として、地域に貢献する心理臨床的相談の機関として、また、大学院生の教育研修の場として、日々活動している。

この間に、2010年に人文学部から教育学部が教育学部として独立し、さらに、2017年度は心理学部が発足するという大学内の変遷があり、心理相談センターの役割も、さらなる変化、充実に求められる時期にさしかかっている。

スタッフは、事務職員4名、教員6名、専門相談員4名、実習指導員2名、検査相談員1名、また教育、指導のもとに臨床実習に携わる大学院生、研究員によって運営されている。

以下に、2016年度の当センター活動の概要を報告する。

II 相談活動

1 面接形態

当センターでは、面接をその形態により分類し、集計している。その分類と内容は表1の通りである。

表1 面接形態

分類名称	含まれるもの	内容
個人面接	カウンセリング（成人）	子どもの心理的、発達上の問題について子ども自身への心理療法や保護者との相談と、主に青年期・成人以降の方を対象にしたカウンセリング
	親子相談	
集団面接	フリースペース：じゃんぼ	主に小・中学生の不登校の子どもたちへの居場所の提供及び集団を通じた援助
心理検査	様々な心理検査、発達検査	

2 面接回数

2016年度は、受理面接88件、年間合計2561件であり、この数年間は、業務量の上限レベルのまま推移している（表2）。

表3の面接形態および月別面接回数について以下にまとめた。

夏季冬季休みにあたる8月、9月、1月は面接回数が若干減ることは、例年通りである。

2016年度は、新規申し込みの、受け入れ枠が一杯のため、2月3月の申し込みに関してはお受けできず、4月にあらためて申し込みをしていた。2月の受理面接は7件あるが、すべて1

月中に申し込みされ、2 月に受理面接実施となった希望のケースである。
たケースである。3 月中の受理面接 2 件は、検査

表 2 面接回数の推移

内訳		年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度
受理面接			80	84	82	90	64	88
個人面接	カウンセリング・親子相談		2,172	2,210	2,154	2,375	2,789	2,416
集団面接	フリースペース		52	10	24	13	11	30
心理検査			16	13	12	26	23	27
発達支援プログラム	学習支援・アセスメント外来		400	363	220	179	—	—
その他	コンサルテーション等		0	1	9	22	—	—
合 計			2,720	2,681	2,501	2,705	2,887	2,561

※発達支援プログラムは 2014 年度末で当センターの業務としては終了。

表 3 2016 年度 面接形態および月別面接回数

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
受理面接	8	7	13	11	4	3	8	8	12	5	7	2	88
個人面接	208	193	224	228	159	190	205	188	214	172	200	235	2,416
集団面接	1	0	2	2	4	3	2	4	3	2	4	3	30
心理検査	3	4	3	1	2	5	1	1	3	1	1	2	27
合計	220	204	242	242	169	201	216	201	232	180	212	242	2,561

3 来談者

表 4 の年齢別・性別の内訳を見てみると、昨年度の傾向と同様、大学生・成人（19 歳以上）の相談が多く、全体の過半数を超えている。多い内訳としては、19 歳以上の女性と小学生男子の相談が目立っている。

新規来談者の来談経路を表 5 に示した。「他機関からの紹介」「学校からの紹介」を合わせると、31 件となりほぼ半数となる。このことから、地

域において当センターの役割が認知されていることがうかがえる。

また、2016 年度は、「相談員を知っている」「相談に来ている人からの紹介」が併せて 13 件となり、増加している。当センターを利用している方からの口コミであったり、以前通っていた方が再来するケース（8 件）が多い一年であった。来談者の満足度や信頼を反映しているとしたらありがたい。

表 4 2016 年度 年齢別・性別相談件数（新規）

性別／年齢	就学前	小学生	中学生	高校生	大学生・成人	合 計
男	0	10	5	3	3	21
女	0	5	4	3	29	41
合 計	0	15	9	6	32	62

表 5 2016 年度 来談者 相談経路（新規）

相談経路	件数
他機関からの紹介	19
学校からの紹介	13
相談員を知っている	8
相談に来ている人からの紹介	6
ホームページ・電話帳で知って	9
知人から紹介	5
その他	2
合 計	62

4 相談内容

18 歳以下の新規来談者の相談内容を表 6 に示した。18 歳以下では、小学生が 30 件中 15 件と半数を占めている。前年度少なかった中学生は、今年度は 9 件で、例年並みの件数となっている。

主訴で最も多いのは、「発達のかたより」である。これまでは、「不登校」が若干多いが、同数だったが、2016 年度は「発達のかたより」が多くなっている。ただし、その内、検査希望が 6 件であり、

心理療法を希望している相談内容としては、「不登校」「神経症症状」が上回っている。発達の偏りがベースにあり、学校不適応など二次的な心理的問題が生じているケースにはプレイセラピーやカウンセリングを行っている。

「その他」に含まれる内容を検討してみると、18 歳以下の主訴分類にはないが、家族関係の問題や思春期の心理的葛藤といった内容がみられた。

表6 2016年度 相談内容（主訴）別件数 18歳以下（新規）

主 訴／年 齢	就学前	小学生	中学生	高校生	合 計
発達のおくれ	0	1	0	0	1
発達のかたより （高機能自閉症・アスペルガー・LD・ADHD 他）	0	4	4	1	9
不登校	0	2	2	3	7
集団不適応	0	3	0	0	3
非行・暴力	0	1	0	0	1
神経症的症状	0	3	1	0	4
その他	0	1	2	2	5
合 計	0	15	9	6	30

表7 2016年度 相談内容（主訴）別件数 19歳以上（新規）

主 訴	件 数
子どもの問題（発達障害・不登校・問題行動・育て方など）	8
対人関係	1
家族関係	4
自分の生き方	10
神経症的症状	2
その他	7
合 計	32

19歳以上の新規来談者の相談内容を表7に示した。

19歳以上の主訴分類には「発達のかたより」の項目がないため、「対人関係」「自分の生き方」などに分類されているが、内実としては、発達障害やその傾向がベースにあり、生きづらさや職場不適応で相談にくる成人のケースが増えており、全体の3分の1程度と思われる。そのうち成人の発達検査希望は4件だった。

子どもとの関わり方の相談も多く、子どもは来所しないが、思春期青年期～成人している子どもの親御さんの相談は約3分の1を占めている。

年齢別にみると、40代、50代が18件で半数を越えている。子どもの問題以外では、過去のト

ラウマや原家族との関係が、現在にも影響があり、生きづらさを抱えている相談が多い。

Ⅲ スーパーヴィジョン

当センターでは、センター長の許可を得て、大学院修士課程在籍者が「研修員」、修士・博士課程修了者、博士課程在籍者が「研究員」として、当センターでの臨床活動を行うことを認められている。2016年度の研修員・研究員の在籍数は表8の通りである。

研修員、研究員が当センターで担当しているケースについては、全ケースにつき専門相談員がスーパーヴィジョンを行っている。1回のスーパーヴィジョンの時間はおよそ50～60分であ

る。

また、卒後教育の一環として、修士・博士課程修了生が、当センター以外の臨床の現場で担当しているケースについて、専門相談員がスーパーヴィジョンを行っている（臨床心理士有資格者 5000 円 / 回・未資格者 3000 円 / 回）。

表 9 は年間のスーパーヴィジョンの回数を示しているが、「学内」は当センター内のケースに

対するスーパーヴィジョンで、「学外」は当センター外のケースのことである。

研修員・研究員の在籍数は昨年度とほぼ変わらないが、一人あたりの担当ケースが増えているため、スーパーヴィジョンの回数はかなり増えており（表 10）、スーパーヴィジョンは、専門相談員の主要業務として、相談業務との 2 本柱となっている。

表 8 研修員・研究員在籍数

	人数
研修員	22 名
研究員	28 名
合計	50 名

表 9 研修員、研究員、修士・博士課程修了者に対するスーパーヴァイズ回数

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
学内	40	42	51	52	38	45	51	55	51	43	49	63	580
学外	2	2	2	3	2	3	3	2	3	3	2	3	30
合計	42	44	53	55	40	48	54	57	54	46	51	66	610

IV 年間事業報告

2016 年度に行われた事業を表 10 に示した。「センター事業関係」は、当センターの運営に関わる事業である。「ケースカンファレンス・地域貢献関係」には、各種ケースカンファレンスと地域に向けての事業を含んでいる。

ケースカンファレンスは、月 2 回の定例の合同ケースカンファレンスと、年 3～4 回の外部講師を招聘しての特別合同カンファレンスがある。特別合同カンファレンスは、毎年いろいろなオリエンテーションの講師をお招きし、ケースを様々な視点から理解していく有意義な機会となっている。

4 月～5 月にかけては、修士課程の新入生が、これから実際にケースを担当するにあたり、理解しておくべきことを学ぶために、「心理相談セン

ターガイダンス」と3回の「臨床オリエンテーション」を行っている。そこでは、心理臨床に携わる者としての基本的なマナー、治療構造の意味、臨床心理的に人を援助するということがどういうことなのか、など心理臨床の基本を理解することを目的に、8 セッションのグループワークを研修員対象に行っている。正解がある世界ではないので、たくさん感じ、考え、葛藤することを大切にしている。

ここ数年は、大学学園祭の時期に合わせて、一般の地域の方々に向けて公開講演会を行っている。2016 年度の公開講演会は、「自分とつながる 世界とつながる音の魔法～耳を『開いて』心身の調和を体感しよう」というタイトルで、音や音楽がもたらす心身へのリラクゼーションや感性を高める体験的ワークを行った。

また、当センターの主旨や活動の様子を地域に に季刊で発行している。
発信すべく、「センター便り」をホームページ上

表 10 心理相談センター 2016 年度年間事業・活動報告

	センター事業関係	ケースカンファレンス・地域貢献関係
4 月	第 1 回センター会議 第 1 回研修員会議 センターガイダンス 臨床オリエンテーション① 臨床オリエンテーション②	センター便り第 5 号発行
5 月	第 2 回センター会議 第 2 回研修員会議 臨床オリエンテーション③	第 1 回合同ケースカンファレンス 第 2 回合同ケースカンファレンス
6 月	第 3 回センター会議 第 3 回研修員会議 運営委員会	第 3 回合同ケースカンファレンス 第 4 回合同ケースカンファレンス
7 月	第 4 回センター会議 第 4 回研修員会議	第 5 回合同ケースカンファレンス 特別合同ケースカンファレンス（永井徹先生） 第 6 回合同ケースカンファレンス
8 月	センター大掃除 玩具類下見・発注	
9 月	第 5 回センター会議 第 5 回研修員会議	第 7 回合同ケースカンファレンス 第 8 回合同ケースカンファレンス
10 月	第 6 回センター会議 第 6 回研修員会議 運営委員会	センター便り第 6 号発行 第 9 回合同ケースカンファレンス 第 10 回合同ケースカンファレンス 公開講演会（新屋賀子先生）
11 月	第 7 回センター会議 第 7 回研修員会議	第 11 回合同ケースカンファレンス 特別合同ケースカンファレンス（弘中正美先生）
12 月	第 8 回センター会議 第 8 回研修員会議	第 12 回合同ケースカンファレンス 第 13 回合同ケースカンファレンス
1 月	第 9 回センター会議 第 9 回研修員会議	特別合同ケースカンファレンス（田中千穂子先生） 第 14 回合同ケースカンファレンス
2 月	運営委員会 第 10 回センター会議 第 10 回研修員会議 玩具類下見・発注	第 15 回合同ケースカンファレンス 第 16 回合同ケースカンファレンス
3 月	第 11 回センター会議 第 11 回研修員会議 センター大掃除	第 17 回合同ケースカンファレンス 第 18 回合同ケースカンファレンス

	センター事業関係	ケースカンファレンス・地域貢献関係
年間	センター会議 11 回 研修員会議 11 回 運営委員会 3 回 センターガイダンス 1 回 臨床オリエンテーション 3 回 研究紀要 No10 発行 1 回 玩具類下見・発注 2 回 センター大掃除 2 回	合同ケースカンファレンス 18 回 特別合同ケースカンファレンス 3 回 公開講演会 1 回 センター便り発行 2 回

V おわりに

当センターが設立されてから 15 年が経過し、近隣の医療機関や学校などからの紹介も多く、絶え間なく相談の申し込みがあることを考えると、地域における心理相談の場としての役割は、だいぶ安定しつつあると言えるであろう。

そうした中、国家資格である公認心理師法が平成 27 年に公布され、平成 30 年には最初の国家試験が行われる予定であり、今後さらに、臨床心理的援助の充実が求められていく時代となっていくと思われる。

一方で、奥が深く、一筋縄ではいかない、ひとの心の世界や人生に向き合う心理臨床の中で、方法が明確で、効果がわかりやすい技法がもてはやされる動きもある。経験やトレーニングを積んでいく中で、さまざまな技法を選択できることは、多様なクライアントさんを援助するために望ましいことだが、十分に経験やトレーニングをつまないま、安易にわかりやすい技法にとびつくことの弊害は大きい。

将来、当センターで実習をした研修員、研究員たちが、それぞれの領域で貢献できる心理士になるためには、初期教育において、心理臨床の根幹や本質はどのようなものなのか、という土台作りをすることが必須であると考えている。

そして、心理臨床の本質を大切にすることが、クライアントさんのニーズに適切に沿うということにもなり、その体験が、また心理士としての成

長を促してくれる。そうした循環が生まれる場であることを今後も常に大切にしていきたい。